

基本計画・設計

◆計画の背景

郵政省では郵便貯金の周知宣伝施設として、全国15ヶ所の郵便貯金会館（メルパルク）の2ヶ所（日光霧降と伊勢志摩）の郵便貯金総合保養施設を設置している。地域文化活動支援施設（愛称「ば・る・るプラザ」）についても、郵便貯金の周知宣伝を目的に建設されており、山口市（平成10年4月オープン）、京都市（平成11年7月オープン）に続き、平成11年10月千葉市に第3番目の施設が完成した。また、町田市、青森市、岐阜市においても、地域文化活動支援施設を開設する予定である。

メルパルクは都市型のシティホテルに近い施設内容であり、総合保養施設は国立公園に立地するリゾート施設であることに対して、「ば・る・るプラザ」は駅前の一等地に立地する文化・余暇施設である点が特色になっている。施設の設置は郵政省が行うが、運営管理はすべて郵便貯金振興会が行っている。

千葉市に郵便貯金周知宣伝施設を設置することは、平成4年に千葉市から郵政省に対して郵便貯金会館の設置を要望されたことを受け、検討が始まった。関東郵政局からの意向聴取に対して、平成5年5月千葉市は、音楽専用ホール、会議室、室内プール、フィットネス等のスポーツ施設を希望する旨、回答した。平成5年度末、関東郵政局が国鉄清算事業団用地を取得。千葉市は平成6年10月にも再度、「ホールを中心とした文化施設」の設置を要望している。

施設は郵政省からの補助金等を受けずに、郵便貯金振興会が独立採算で運営するため、郵便貯金振興会では数種の計画案を作成して、事業収支の分析、比較検討を行った。同時に、㈱三井情報開発に市内の既存施設の調査と市民へのアンケート調査（無作為抽出による18歳以上の千葉市民700名を対象）を委託してニーズの把握を行った。地元の要望と郵政省内部の検討結果を踏まえて、平成7年3月、郵政省貯金局

は千葉市に対して、文化施設、余暇施設、飲食施設と郵便貯金PRコーナー、千葉市案内コーナーからなる施設概要想定案を提示した。

千葉市は平成7年4月、文化施設として音楽専用ホール（800席程度の規模を有し、音響効果に優れたグレードの高い音楽専用ホール）、余暇施設としてプール、および千葉市情報コーナー（千葉市の観光、公共施設、イベント等を紹介するコーナー）の設置要望書を提出、郵政省は同年6月、800席のば・る・るホール、ミニスタジオ、会議室、スパ（娯楽性を加味した温浴施設）、フィットネス、レストラン、郵便貯金PRコーナー、千葉市情報コーナー等で構成される施設内容とする旨、回答した。

平成7年7月に設計が開始され、平成8年12月に第1回工事（構造躯体、PC、カーテンウォール、外部建具等）が、平成9年7月には第2回工事（内装仕上げ）が着工、平成11年10月に完成した。業務開始は平成12年2月18日である。施設の基本構想を取りまとめるのに約3年、設計・積算に1年半、工事に3年、開業準備に4ヶ月の時間を要している。今後、地域に密着した高品質な文化活動を支援する施設として、千葉の文化創造・発信の中心的役割を担うことが期待されている。



JR千葉駅東口 市街地全景

◆周辺都市再開発との連携

敷地はJR千葉駅東口から徒歩5分の所にあり、幅員35mの道路を介してJR総武線に接している。施設が立地する富士見町は、中央大通りに面しては銀行や大企業の支店が立ち並んでいるものの、街区内部は低層の飲食店や遊興店、屋外駐車場が立地し、細街路によって区画されているため、駅周辺地区にふさわしい法定容積率（60%）を十分に活用した土地利用がなされていない。

郵政省の敷地東西にある市道の幅員は、工事着工前はわずか4.55mと、延床面積が2万㎡を超える施設が立地するには狭すぎた。そのため将来の駅前再開発計画を考慮して、郵政省用地と千葉市道の交換が行われ、敷地東西の道路は従来の2倍に拡幅され、歩道が施設周辺に整備されることになった。

「ば・る・るプラザ千葉」は、市民の文化・余暇活動を幅広く支援する機能を持つため、今回の施設の建設を契機に、富士見町や近隣の栄町がこれまでとは異なる年齢、階層が集う、駅周辺地区としてふさわしい町に生まれ変わることが期待されている。周辺では、同時期に千葉都市モノレール栄町駅や公園、都市型集合住宅が完成しており、再開発に向けての動きが進展しつつある。

◆立面・外装計画

建物の北面は近くを走る総武線や千葉都市モノレールの車窓から、つねに多くの方が眺めることになるため、施設内部の構成が理解できるようなデザインにしている。

外装PC版は建物の垂直性を強調するため、縦方向に割り付けている。フッ素樹脂焼付塗装のアルミパネル打込PC版と100角タイル打込PC版の2種類を採用した。

外壁タイルは平滑な一般タイルの他に、同色ながら表面形状が違う特殊面状タイルを組み合わせている。タイルの凹凸が作る光と影の移ろいが、太陽の高さや動きに応じて、季節により、時間によりあるいは天候によって、建物の表情を時々刻々と変化させる。一方、アルミカーテンウォールには水平フィン（150mm）が取り付けられており、リズムカルな陰影を与えている。サッシ方立にもステンレス鏡面の垂直部材が設けられていて、時間帯によって太陽光を受けてきらりと光るハイライトを生みだしている。

太陽の光を介した「環境情報」を建物のファサード（外壁）が映し出すことにより、大きなビルがただ無表情に建つのではなく、それを見る人に季節感や絶えず変化する自然環境を意識させることができると考えた。



南立面詳細

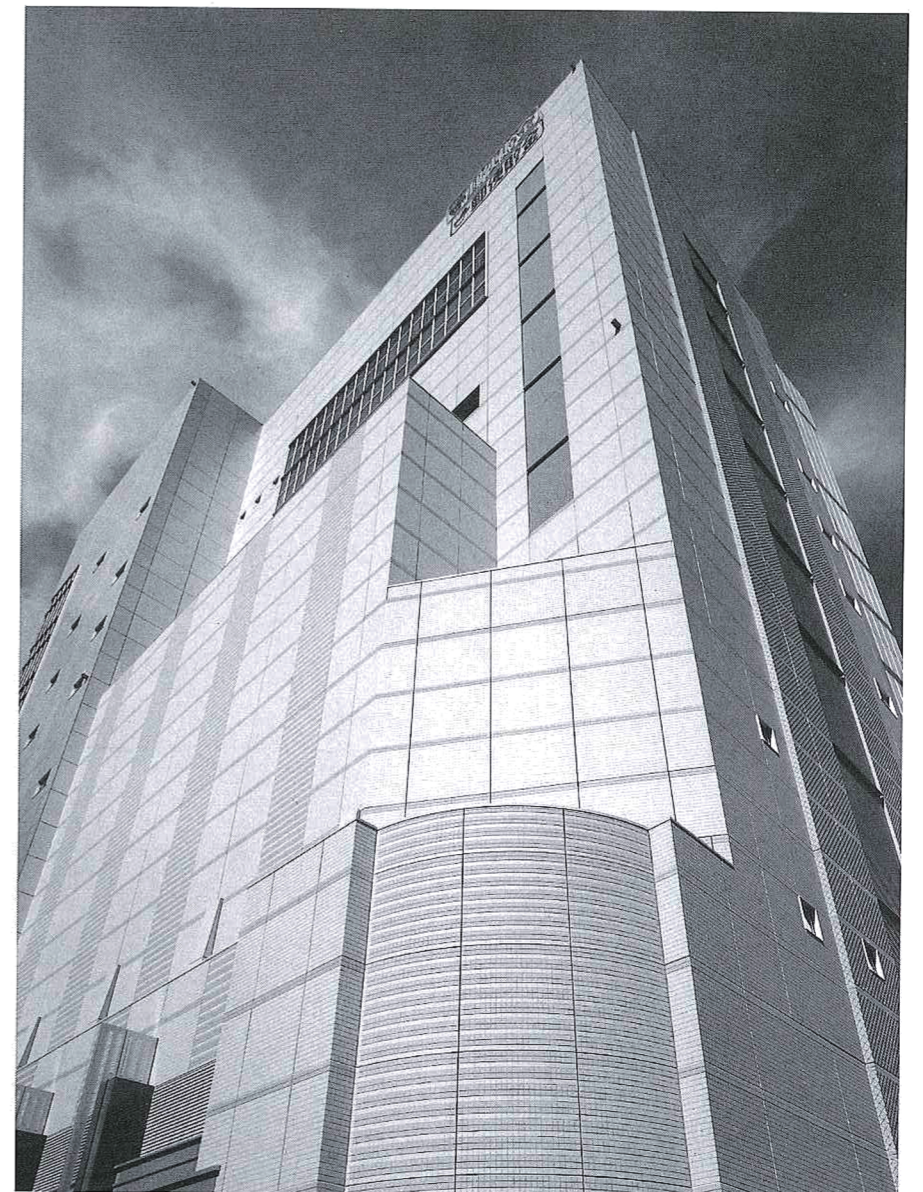
◆防災計画

建物は地下2階（SRC造）、地上11階（S造）、最高高さ75.39m。3～5階の中間階には客席数719席のば・る・るホール、8～10階の高層階にマシンジムやアクアフィットネス等で構成される運動施設が設けられている。最上部に緊急避難用ヘリポートを持ち、非常用エレベーター、避難階段をバランスよく配置することで、不特定多数が利用する複合施設として必要な防災機能を確保している。

各用途は各階ごとにまとめて構成され、同一階に他用途が混在しないよう配慮した。東西に長い平面プランに対し、西側・南側・北東角の3ヶ所に直通避難階段を設け、避難上バランスの良い配置としている。最も主要な西側の階段は避難階（1階）で直接外部に

避難できる構造とした。これと対極にある北東角の階段は屋外避難階段で、ば・る・るホールのある3、4階では避難上有効なバルコニーを介してこの屋外避難階段へ避難する計画とし、安全性を一層高めたものになっている。南側階段も避難階では階段に近接した出口から避難できる計画とし、避難階の避難者の大部分とは避難経路が重ならないよう配置されている。

防災センター（中央監視盤室）は、避難階直上階（2階）の非常用エレベーターおよび避難階段から近接した位置に設置し、外部からの進入が容易でかつ消防活動が円滑に行えるようにした。非常用エレベーターを2基設置し、それらを離して別々の避難階段近くに配することにより、より多様な消防活動ができるよう配慮している。



南立面コーナー部分